



風の歌声



吉屋令樹

女性名詞 関係代名詞

名詞に逐一男女の別があること、関係代名詞という文法ツールの存在、この二つはわが国語にはない。

名詞の性は英語にはないがフランス語をはじめラテン系の言語では冠詞、動詞、修飾形容詞など男女の別にしたがって判然と分別活用、変化する。ロシア語などでは人名のような固有名詞すら男女の別により語尾がはっきりと異なる。ドイツ語では男女だけでは分類に不十分ということなのか中性名詞まで用意している。

ともあれこのことは文脈をたどる上には誰があるいは誰をどうしたということが極めて瞭然として曖昧さが排除され論理的になるという効用がある。「わが愛するひとよ」と言っても冠詞や名詞の語尾によって相手が男女いずれか明瞭である。加えて文章に一種の彩りが副えられる趣きを感じられる。

もうひとつは関係代名詞。わが国語はこの便利な用法を欠いているため、場合によってはやや長々とした説明となる修飾節を名詞に前置しなければならない不便を味わうことがしばしばある。

实例をひとつ。

実は述べたいのは文法のことではない。

かつての豪華客船への挽歌なのである。

ここにひとつのシャンソンの歌詞がある。表題を **Le France** という。
おや **France** は女性ではなかったかな？

Le France

Quand je pense à la vieille anglaise
Qu'on appelait le "Queen Mary"

わたしがかの英国の老女に想いを馳せるとき
そのひとを人は「クイン メリー」と呼んだのだ

が

Echouée si loin de ses falaises
Sur un quai de Californie

あの崖からかくも遠く漂って
カリフォルニアの波止場に

表題は **Le** という冠詞がつき 男性名詞

1行目は **La** がついて 女性名詞 形容詞も女性変化

2行目には メリー女王に男性の冠詞**le**が。この行アタマの**Qu'**はq u eの短縮形で関係代名詞、**appeler**の目的語

英語に直訳すれば

When I think about the old English woman

Whom they called the "Queen Mary"

つぎの **falaises** は英仏海峡の景観、長くつづく白い石灰岩の崖であろう。ふるさとの景色をあとに遠くさすらって還ることのなかった老婦人クインメリー。今もアメリカに繋留されている

。

フランス語で「船」は男性名詞なのである。 **Le bateau (the ship)**

詞はつづく

Quand je pense à la vieille anglaise

わたしがかの英国の老女に想いを馳せるとき

J'envie les épaves englouties

漂流物として波に飲み込まれてしまいたい

Longs courriers qui cherchaient un rêve

夢を探し求めそして二度と故郷を見ることが

Et n'ont pas revu leur pays

なかった長旅の伝書使船

サントテグジュベリの夜間飛行ではないが新しい航路の開発と夢を求めて挑む冒険的な郵便輸送を想起させる

Ne m'appellez plus jamais "France"

もう二度と私を「フランス」と呼んでくれるな

La France elle m'a laissé tomber

フランス、彼女は私を貶めた

Ne m'appellez plus jamais "France"

二度と私を「フランス」と呼んでくれるな

C'est ma dernière volonté

それが私の最後のお願いだ

J'étais un bateau gigantesque

わたしは巨大な船だ

Capable de croiser mille ans

千年だって航海できる

J'étais un géant j'étais Presque

わたしは巨人だった、まさしく

Presqu'aussi fort que l'océan

まさしく大洋と同じくらい強靱だった

詞はここではじめて「わたし」が巨大客船であることを明らかにするが、聴衆はすでにこれまでの男性、女性名詞の使われ方や、**Queen Mary** が第2次大戦中輸送船として転用されUボートを警戒して**zigzag**航行をするうち味方の軽巡洋艦と接触し死者を出したこと、戦後は英国に帰ることなく虚しくカリフォルニアの埠頭に繋留され海上ホテルとなっていることなどに想い至っている。そしてフランスが建造しその命名も国名をもってした豪華客船の運命にも。

J'étais un bateau gigantesque
J'emportais des milliers d'amants
J'étais la France qu'est-ce qu'il en reste
Un corps mort pour des cormorans
Ne m'appellez plus jamais "France"
La France elle m'a laissé tomber
Ne m'appellez plus jamais "France"
C'est ma dernière volonté

わたしは巨大な船だ
わたしは幾千の恋人たちを運んだ
わたしは今のフランスと同じだ
ブイに繋がれている死に体のごとく
もう二度と私を「フランス」と呼んでくれるな
フランス、彼女は私を貶めた
二度と私を「フランス」と呼んでくれるな
それが私の最後のお願いだ

Quand je pense à la vieille anglaise
Qu'on appelait le "Queen Mary"
Je ne voudrais pas finir comme elle
Sur un quai de Californie
Que le plus grand navire de guerre
Ait le courage de me couler
Le cul tourné à Saint-Nazaire
Pays breton où je suis né
Ne m'appellez plus jamais "France"
La France elle m'a laissé tomber
Ne m'appellez plus jamais "France"
C'est ma dernière volonté

わたしがかの英国の老女に想いを馳せるとき
あの「クイン メリー」と呼ばれた婦人
わたしは彼女のようにには終りたくない
カリフォルニアの波止場で
最大のいくさ船に
この身を墜してまで
サンナゼールの船渠に背を向けて
そこは私が生まれたブルターニュの地
もう二度と私を「フランス」と呼んでくれるな
フランス、彼女は私を貶めた
二度と私を「フランス」と呼んでくれるな
それが私の最後のお願いだ

Michel SARDOU の絶唱はここで終る。

1975-6 のヒット曲である。この前年ノルウェイの会社へのこの船の身売りが発表されている。1960年就航からまことに短い栄光の時期であった。

1979年にはその名も **Norway** と改名されカリブ海クルーズに充てられていた。
66,348トン 全長315メートル余 2本の煙突 船体は黒 白い客室部分が紺青に映えて縦長の昔風の美しい客船であった。

ついでながら近年(2004) **Queen Mary II** が歌詞にある同じ造船所 フランス ブルターニュのサン-ナゼール にて建造され就航している。

148,528トン 全長345メートル 近年の大型クルーズ船は腰高で巨大なビルのようなものである。2009年3月開港150年を迎えた横浜に寄港した。全高72メートル喫水10メートルでは海面から道路まで55メートルのベイブリッジをくぐる事が出来ないので大栈橋ならぬ大黒埠頭に着岸した。

さてその後のフランス号は**Norway**の名でカリブ海をクルーズしていたが、ボイラ事故などもあったようで再度所有社も変わったのか船体も青く塗られ**Blue Lady** などという名で働いていたようである。

不似合いの安っぽい派手な青い衣装をまとった老残のすがた みじめななまえ。
その後のことは知らない

On ne sait rien, rien du tout !

風のうわさでは最後にインドの**Alang** なる地、軍艦など大型船解体の墓場へと曳かれていったという。

相関接続詞

相関接続詞

ドイツ語で接続詞 (**konjunktion**) とは云うまでもなく語と語、句と句、節と節を結びつけるものだが、**und oder aber denn** のように対等の関係で結び付けるものを **並列接続詞** というらしい。

そして **並列接続詞** の一種として他の語とともに熟語的に用いられるものは **相関接続詞** と称される。

- **zwar..., aber** ~ (確かに...だがしかし~)
- **nicht..., sondern** ~ (...ではなく~)
- **entweder... oder** ~ (...か~か)
- **nicht nur..., sondern auch** ~ (...だけでなく~もまた)
- **sowohl... als auch** ~ (...も~も)
- **weder... noch** ~ (...も~もない)

このうち **entweder... oder** ~ と **sowohl... als auch** ~ は前置詞でありながらしばしば一つの観念を意味する名詞のように用いられることがある。

Das Entweder-Oder wird zunehmend von einem Sowohl-Als-Auch abgelöst.

「・・・も ~ も」から「・・・か ~か」へ では日本語として表現にしまりが無い。ここは「選択から共存の社会に」 とでも訳すのだろうか。

昔然るべき所でしかるべき人の話を聞いたことがある。前後、内容は失念したがそのなかに、「あれもこれも ではなく あれかこれか でなければならぬのであります・・・」 という文言があった。

いかにも格調の低い表現をなさるものだとその時は思った。

あとで考えると旧制高等学校世代の方だから **Sowohl-Als-Auch** ではなく **Entweder-Oder** でなければならぬ というのを平易に言われたに違いないと悟った。

いまだきならさしずめ 総花主義を廃し選択と集中を図らねばならぬ という表現であろうか。

ついでながら **Goethe** の **Die Leiden des jungen Werthers** 高橋義孝訳 新潮文庫版
ウエルテルの8月8日書簡にも

「・・・世の中ではあれかこれかで片のつくようなものはそうめったにあるもんじゃないってことだ。・・・しかもあれかこれかの間をぼくがなんとかしてすり抜けようとしても、だから君は悪く思いはしないだろう。」という言い回しがある。

風の歌声

<http://p.booklog.jp/book/22179>

著者：吉屋令樹

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/aurossi/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/22179>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/22179>